校長ニューズレター（第 12 号・3 月号） 宜野湾市立長田小学校校長：横山芳春

子どもと向き合う1000時間

ある方が、「先生方は授業研究に忙しくて、子どもに向き合う時間がないのかな…」と心配してくださった。

学校で、“子どもと向き合う時間”はどういった時間があるのか考えてみましょう。

1000 時間。これは 1 年間の授業時間数です（正確には、1 年生の 816 時間から 6 年生の 980 時間）。そのほかは「朝の時間」、「朝の会」、「給食時間」、「帰りの会」、「放課後」など。子どもと先生が一対一になれる時間は、放課後の時間（下校時間は決まっているが、相談事があればもちろん残ることができる）。

先生たちが、子どもに向き合う時間でもっとも多いのが授業時間です。

校長としては、何といってもこの 1000 時間の質を高めていくことが基本の仕事です。この時間をいい加減にして、ほかの時間で子どもと向き合っています、という先生はまずいないと思います。授業時間をいい加減にすると、問題がでてきます。“わからない授業”を 1000 時間も続けていると、子どもはどうなるでしょう。学力がつかないことはもちろん、一日中苦痛です。希望に燃えている子どもたちは、日々、その思いがやせ細っていくことでしょう。授業中、ウロウロしたり学校から逃避する子どももでてくることでしょう。

反対に、「授業のやり方によっては、どの子どももが、目を見はるような豊かな力を生き生きと表に出してくるものである。授業によってのそういう事実は幾らも出ているのだから、これは否定することはできない。（斎藤喜博）」、これは事実です。質の高い授業が子どもたちを生き生きと成長させていった様子を、つぶさに何度も私はみてきました。

さて、このように子どもの内なる力を引きだし、成長させることのできる授業はどのようにして創られていくのでしょうか。

授業は先生が行います。授業の質は、先生の能力によって決まります。「大学等で一定の単位を履修して教員免許状という資格を取得した者が、それだけで教師たるにふさわしい資質（能力）を獲得したとうはいいがたい」のも事実です。

教師の資質（能力）は、つぎのふたつが必要です。

①「教養とか人間のおおきさとか豊かさ」

②「授業の原則や法則を学んでいる」

このような総合的な力をもっていたとき、授業は豊かなものになっていきます。

したがって、先生は、質の高い授業を創りだすために、またすぐれた授業を創りだす教師としての資質をつくっていくために、どんな試みでもしていかなければなりません。それが仕事ですから。

学校で必要なことは、質の高授業研究を組織的におこない、先生たちの資質・能力を高めていくことです。そのことが子どもたちの成長に直結していくのです。1000 時間の授業をとおして、子どもたちは高められていくのです。

校長のおおきな仕事は、日常的なアドバイスとともに、質の高い授業研究ができるよう、一流の講師陣を招いて本校の先生たちに、学ぶチャンスを作りだすことです（年 4 回の講師招聘研修会を H22 年度予定）。子どもたちの課題、先生たちの現在の課題をみつけて、それを乗りこえられるような、研修プログラムを研究主任とつくっていくことです。

校長の仕事の中心は、学校の教育力を高めることです。そのために校長は教育活動の中心である授業の質を高めていかなければなりません。そのことが、もっとも本質的な面で学校を経営していることになると考えています。ご理解・ご協力をお願いします。

１年間ありがとうございました！